

文化について…【文化とはなにか】を中心に

『文化』という言葉は一般にどう使われているか？

①「文化遺産」として残されている思想、学問、芸術など

例：寺社仏閣、絵巻物など歴史的な意味を持ったもの。

②新しい、新式なもの、今まで使っていなかつた便利なもの

例：文化住宅、文化たはし、文化人(欧米事情を紹介してくれる便利な存在という意味で)

→どちらも本質を表面的にしか捕らえていない。

福田の考える『文化』は、T・S・エリオットを引いて

*「文化とは、たんに幾種かの人間活動の総計ではなくして、ひとつの生き方である」

という簡明な定義を下している。

*「文化とはわれわれがそれを意識的に目的とすることのできない唯一のものである」という別の定義も下しているが、これは文化という概念の本質を言い当てた言葉だ。文化とはその中にくらしているものには必ずしも意識化されてはいないが、社会生活全般にしみわたっている「生き方」の様式のようなものである。

※以上、『反近代の思想(筑摩書房・昭和40年)』、P16,17より

「文化とは生き方である」というエリオットの言葉はこの他にも『文化破壊の文化政策』『伝統にたいする心構』などでも引用している。

美術とか建築とか、今日も残つてゐる国宝のやうなものだけが文化ではありませんが、そこには貴族と庶民とを問はず、その時代の生きかたが現れてゐる。……ただ忘れてはならぬことは、「文化遺産」としてのこつてゐない日常的な生活、たとえば親子の関係とか、風俗とか食べ物とか、さういうものも文化であるといふこと、いや、さういう基盤となる平凡なものこそ文化であるといふことがあります。したがつて、芸術作品もその日常生活との関聯において共通のものを持たなければ、真に文化と称するに値しないし、また今日に至るまで「文化遺産」として残らなかつたであります。

省みて、今日そうした統一性を持った文化は甚だ希薄であり、「一方には現在の国民生活とは一般に関係のない国宝的文化があり、他方、私たちの国民生活に関係はあります、少しも私たちの身についてゐない外来文化がある」

⇒こうした混乱は明治以来続いてきたもの。陸軍・法律はフランス、海軍はイギリス、医学はドイツというように一番優れているものの寄せ集めでやってきた。

世界の知識を集めるといふと、たいへん聞こえがいいのでありますけれども、わた

しはそんなことで、たうてい世界の知識は集められないとおもふ。なるほど、いちおう集まるかもしれません。が、集めてなにをするのか、また、だれが集めるのか。問題はそのへんにあります。この蒐集作業には、集める目的、集める主体、つまり、「日本および日本人」といふ概念が見うしなはれてゐますまい。

ヨーロッパ旅行の体験から、いかにヨーロッパ人が「頑固なくらゐ自分を守つて」生活をしているかを具体例をあげて語った後、

なにもヨーロッパは日本にくらべて文明開化してゐるわけでもなければ、合理的な人間でうまつてゐるわけでもない。私は決して古いものをいちばん守れといふではありません…文化の有機的なありかた、文化といふものがいつでも統一を欲するものといふ事実から考えてみて、保守性といふのは文化にとつて欠くべからざるものなのです。

保守性とは「分離を嫌い、求心的な運動を続けるもの」。対象にあるのが「革新」。

ヨーロッパ：古いものをなかなか改めない。国民全体が古いやり方では到底やりきれないという段階になって初めて革新が一歩一歩行われる。改革者は命がけの反逆者であった。

日本：革新が常に錦の御旗。明治大正はヨーロッパ、戦後はアメリカ占領軍が身方。外国で実施済みの革新がすでに良かったという証明ずみのものばかり入ってくる。

日本における革新事業の特色は、必要から発しておこなはれたといふよりは、十分に古いもので間に合つてゐるのに、そこへ新しいものが、ただ新しいがゆゑにはいつて来るといふふうにおこなはれてきたのであります。

要求を前提として、それを土台に、何か新しいものを生み出そうといふのと、要求がないうちに物のはうが先に来てしまふのとでは、大変な違ひです。

自分の要求にさきだつて、物のはうからちかよつてくるといふ状態、その為に陥つてゐる一種の現代病を、私は**自己抹殺病**と名づけたい。

自己抹殺病：何か行動を起こす場合に自分の要求に基づいてではなく、理由付けを自己の外部に求めること。「現実がこうだから」、「未来はこうなるから」など。

⇒自己の我欲を普遍的・抽象的問題にすりかえる小心卑劣な自己主張。

自己抹殺病は、あらゆる問題から自己の生きかたを消去し、さうすることによつて、

自己の行為からの責任をまぬかれはできるでせう。がさういふ消極政策は、自己の生活から不幸を排除するに役立つといふだけのことで、積極的に幸福を呼び寄せるにはなんの効果ももちはしません。自己を肯定し、自己を守るために文化がないところでは、たとへ食うに困らぬ身分でも、私たちは生きる楽しみを享受することはできないであります。

福田が別の論文で述べた言葉を引用して敷衍すると

現代は専ら「自己の生活から不幸を排除する」することを目的にしている社会であり、近代文明とは「自然や社会が人間、個人に与える害に対する防御装置を出来るだけ完璧なものにしようと努める事(人権と人格)」である。人間は対象との間の不調和や摩擦を避けるために防御機構を置いている。それが「完璧になり分厚になればなるほど、自己と対象は相触れず」にすむようになるが、「自己とは対象との交渉史」であるから「すつかりその機構が整つた暁には、自己は完全に消滅してゐる」という状態」になる。最終的には「行動への意欲を失つてしま」い、「社会科学的防衛機構は人間を虚脱状態に導く(自己抹殺病といふこと)」

※文化がないとなにが問題か？

「文化とは生き方である」⇒「文化がないということは生き方がない」という事になる。
文化とは生きかたであります。適応異常や狂気から人を守る術であり、智慧であります。それは科学ではどうにもならぬことであり、また一朝一夕で出来あがるものではありません。(中略)が、文化があり、伝統のあるところでは、社会が、家庭が、それを教えてくれる。(中略)文化がなければ、私たちは生きられないのだといふことを自覚していただきたい。狂気と異常から身を守るために、それがどうしても必要なのです。個人個人が自分で生き方を知るやうに強制されてゐる社会では、個人はその負担に耐えかね、何事もなしえないでせう。『伝統にたいする心構』